

修士設計
てしま
豊島環境研修館
—産業廃棄物不法投棄跡地へ
の提案—

菅野 二美
80

菅野 二美
指導=高宮 真介
(青木 あすさ、芥川 文恵)

菅野: 知っている人も多いと思いますが、香川県の小さな離島豊島で、日本最大規模の産業廃棄物不法投棄問題が起きていて、私は、その不法投棄された産廃が処理された後の跡地を敷地として想定しました。その敷地を今後どうリクラメーションするかということを考えて、まず、敷地が豊かな自然に囲まれているということと、産廃不法投棄問題が起きた場所ということから、環境問題をテーマにしようと思ったんです。しかし、実際に敷地に行くと、島の人たちと話をすると、産廃問題や過疎化の問題など、地域の問題の重さを実感したんです。それで、修士設計では、地域の再生と環境問題をテーマにすることにしました。例えば、ドイツのエムシャーパークや長崎ハウステンボスがありますが、それらに比べたら小規模ですけど参考にしました。プログラムは、豊島の人たちが主体となって運営して、来訪者が環境問題について学ぶ環境研修館というもので、それを創ることによって地域の問題を解消していき、環境問題についてみんなに伝えていくことを考えました。設計に関してですが、ここは、事件とか社会的、歴史的にみればすごくポテンシャルの高い場所ではあるんですけど、国立公園普通地域で、周りに何もなくて、コンテクストがなかったの、デザインの糸口として、昔の地形や産廃の地形を復元して、その復元された地形の中に建築の機能を入れていくという方法をとりました。地域の問題と環境問題は全国各地にあると思います。そのような問題に対して、解答は色々あると思いますが、このプロジェクトでは、まず、ここ豊島で何ができるかということをも優先して、プログラムと施設の規模とデザインを考えていきました。

高宮: 他の二人もそうだけど、あなたのは、すごく重いというか暗いテーマだよ。ほとんど島民になりかけちゃったという努力は評価するな。でも、産廃問題やゴミ問題とか、結構克明にマニアック的に調べただけで、全部大変な問題なので、その点では、入り口で終わってるよね。というか産廃問題に見切りを付けて、焦点を地域の再生

にシフトした。そこで暗いテーマが一挙に派手なプロジェクトになった。

芥川: 菅野さんのは派手だよな。

菅野: 派手ですか？

一同: 派手だよ。

高宮: あなたに言ったけど、すごく環境負荷の大きい建物つくっちゃったっていうところあるじゃない。

菅野: それは確かにあります。でも、決して、派手にしようとしてこうした訳じゃありませんよ。ここに何かを創ろうとしたとき、あまりにもコンテクストがなくて、結局、地形や歴史を顕在化させてそれをランドマークやモニュメントにするというアイデアがでて、こういうことになってしまったんです。

高宮: だから、全部今の地形のままです、木でも植えてさ、どぼんの便所つけるようなのが本当が一番よかったんじゃない。そういうのやろうとしたじゃない。

菅野: そうですけど。環境問題をテーマにしたとき色々やり方はあると思うし、何かを作るときの壁はあると思うんです。設計するときに、一番影響が強くて最後まで引きずってしまったのは、実際この場所に行って、島の人たちの生の声を聞いたことだったんですよ。フェリーに乗って瀬戸内海を渡っている時に、瀬戸内海は確かにすごくきれいだっんですけど、そこら中で採石とか行われていて、島の人に、関西空港をつくる時、近くの島が、まるごと一つなくなったという話とかも聞いて、建設活動がこれほど影響を与えてるんだということもすごくショックでしたよ。小さい島で、島の人たちやボランティアの人たちが徹夜して島の将来について話し合ったりしていることは行って初めて知った現実でした。だから、環境問題だけでなく地域の再生問題をテーマにしたかったんです。

高宮: やっぱり、豊島の人たちのための、再生のための施設だという視点で見たときにこれは正当化される。ハウステンボス系だよ。エコロジカルな建築を考えたという話になるとちょっと違うよね。

菅野: 最後まで、環境問題と村おこしの間で揺れ動いて、最終的に設計に落とす段階でかなり悩んでしまって、デザインしきれていないところがあるという

のは反省点です。でも、発表の時の質問で、吉野先生に「ハウステンボスを思い出しました…」と言われたときは、意図を理解してもらえたんだと思ってほっとしました。

青木: 修士を終えて思ったのは、私たち3人に共通して言うことなんですけど、場所の特異性の問題にぶつかったとき、これまで研究してきた問題との間で揺れ動くポイントが必ずありますよね。

菅野: 確かに、研究して調査して、いざ設計する段階で、それをどうデザインに落とししていくかということが難しい。もしかしたら、さんざん研究した内容が、無駄ではないけど設計に現れてこないとか、水面下という段階で終わってしまうこともありますよね。

青木: 研究しすぎると逆に、かんじがらめになって何もできなくなるじゃないですか。そのことに関してのアドバイスはなにかないんですか？

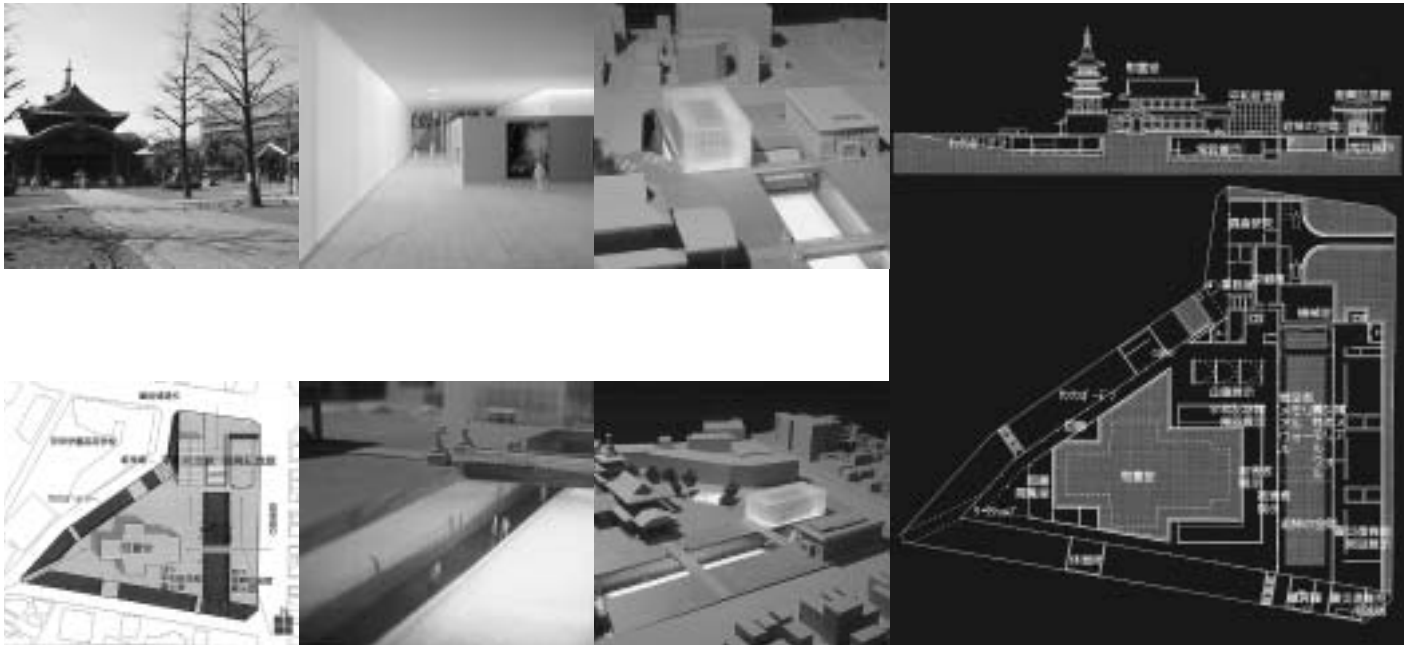
菅野: 修士設計における研究と設計ということに関して、来年の人たちのために。

高宮: 他の人のプロジェクトで、すごくよくやってるのがあるじゃない。よく勉強してるし、計画としてしっかりしてるし、だけど、それをただ設計に落とすだけでなく、そこにさ、設計者としての視点というのかな、「だから僕はこうする。」「これについて勉強したけど、やっぱり僕は、違うと思う。」とか「これからのゴミ問題はこうあるべきだ。」っていうような設計者の視点がなきやいけない。それがほしいんだよ。設計者であるために、なにかをくつがえしてでもやらなきゃならない時があるんだよ。それが、やっぱり設計だと僕は思うよ。

芥川: 計画したものを、そのまま突き進めたら、資料集成建築になってしまいますよね。

青木: あくまでも設計者の立場でものを見るということですか。

高宮: 設計者の立場ですごく個人的にみえるかもしれないけど、そうじゃなくて、「建築家としてのアカウンタビリティ」っていうでしょ。やっぱり設計者っていうのは医者と一緒に、社会に奉仕する職能ってあるわけじゃない。そこにアカウンタビリティっていうきちんとした責任がある、社会に対して、提案するというのがあるべき姿だと思う。



芥川 文恵
 指導=高宮 真介
 (青木 あすさ、菅野 二美)

芥川：私は平和祈念館の設計を横網町公園で行いました。現在都の計画では、復興記念館を一部保存し、大部分を地下に建設するという計画です。横網町公園というのは歴史のある敷地で、関東大震災の追悼の意を込めて伊東忠太が建築を設計し、その後東京大空襲の殉難者の遺骨も奉ることになった土地です。ここに平和祈念館を併設するのに、ほとんどが地下建築の中でどう空間を作るか、平和祈念館と復興記念館をどうわけて、位置づけるかというような問題を扱いました。

高宮：カウンタープロジェクトとしては、評価できるよね。都が考えている計画は、復興記念館との合築で、しかもこの部分に建てなさいと限定していて、信じられないようなプログラムなんだけど。でもやっぱり、平和祈念館という得体の知れない難しいプログラムに挑戦したわけで、平和祈念館とはどうあるべきかという情報開示の仕方、展示とかに対して、もっと突っ込むか、もしくは場所柄、伊藤忠太に対してもっと突っ込んでいくか。どっちかしかないと思うけど、両方ともつこみ不足で稀薄になってしまった感じがするよね。

芥川：慰霊堂は全面保存して、でも復興記念館は保存再生するために手を加える必要のある建築だとは思っていて、でも今回は、エレベーターの改修くらい

しかできませんでした。
 高宮：何となく2階の床を抜いたとかで、終わってるよね。
 芥川：もっと、提案できる内容だとは思いますが。

高宮：たとえば、もっと、歴史研と一緒に調査をしてどうやって改修していくかとか考えれば、すごく面白いテーマだと思うんだけどね。

芥川：もっと、リアリティをもってやれば面白かったとは思いますが。

高宮：その辺が欠落しているから、プロジェクトとしての厚みがないんだよ。

芥川：平和祈念館の方は類似施設の研究や、戦争に関する本を読みましたが、言い訳になるのかもしれないけど、私たち戦後世代は知らないのようになってしまう部分があります。真実を知る施設にするとか、加害者としての展示も必要だとか、そのほかに何かいえるんだろうという気がします。

青木：こういうテーマって私情をどこまで挟むかというのがあるんで、戦争という私情がからんできて、そのまとめ方が私達戦後世代には難しいと思います。あと、中の展示に関して疑問なんですけど、メモリアルウォールの方に対して被害者展示を行って、慰霊堂の方に対して加害者展示を行っているというの何かあるのかと思ったんですけど。

芥川：そういう考え方はしてないんだけど……。

青木：日本は表だって加害者としてのスタンスがないという考えが働いているのかなと思って。

菅野：そういうふうには思うかもしれないよね。設計者にそういう意図がなかったとしても、見る人がそう思うところもある。

芥川：ただ単純に明るい空間は被害者展示で、暗い空間は加害者展示という作り方をしたんだけど。慰霊堂に近いとかではなくて……。

青木：スタンスとして、加害者の方をアピールしたいというスタンスなら違う配置計画もあったんじゃないかな。

高宮：ただ、実際は、横網町公園で加害展示をすること自体難しいと思うよ。

芥川：それは発表の時、質問されませんでしたね。

高宮：全然地縁のないところで加害展示をやって、平和祈念館というのは分かるけど、ここは実際、東京大空襲で身元の分からない人が亡くなったところでしょ。戦地に行って死んだ人を祀る、千鳥が淵がそうでしょ。ここはちがうんだよね。だからこの地で、加害展示をするというのに対して、どうしてこの場所に加害展示がなければならぬのかと思う人もいるかもしれない。

菅野：この設計の面白いところは、伊東忠太の建築のある場所に新しい建築をどう作ったかという解答が面白いと思うんです。復興記念館の場合は、様式的に対して抽象的、装飾性に対して透明性のある建築を作っている。もう一つは、強烈なデザインの慰霊堂に対して周りを彫り込んで地下に作っているというの、こういうのができたら伊東忠太の建築のたまたまは

かなり面白いと思う。例えば、MoMAのクールハースの案を思い出します。(笑) 対称性を出して作ることで、新しいたまたまを作るというのは設計として面白くなっている。最終型として、そういうものが強くでているというのが、展示内容につこみがこなかった原因なんじゃないかな。

高宮：あと、敷地に関していえば、全部地下にするのはとんでもないということで、はじめは安田学園のある隣のブロックを入れて敷地にしてたよね。

芥川：でも、入れない方がリアリティがあって良いということに途中からなって……。

高宮：逆にだからこれだけ緊張感のある建築ができたんだよね。

菅野：敷地が大きかった時の案に比べれば全然良くなったよね。伊東忠太の建築に対して隣に何か作らなくてはならないというのはすごく難しいと思うんだけど、最初はどうするべきかという解答を出すことを放棄してた、避けていた設計に見えていたけど、これだと、それに対して答えている。

高宮：逆に何でもできちゃうから困ってたんだよね。

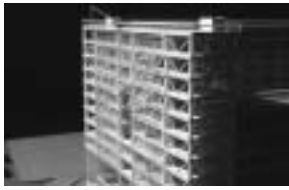
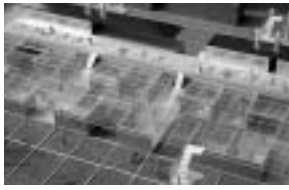
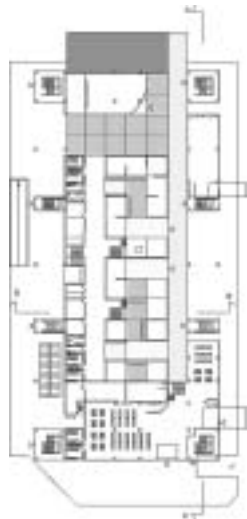
芥川：伊東忠太の建築言語を頼りに建築を作ろうとしていたから、難しかったです。

高宮：ただ、敷地の特異性によりかかって、ただ上手く作ったということに対して、たぶん評価されたんだと思うけど。本当は修士設計はそうじゃなくて、研究の成果をとおしてもっと突っ込んだ提案があるべきだったと思う。

修士設計

横網町公園における東京都平和祈念館の設計

芥川 文恵



は、スケルトン-インフィル型住宅とコレクティブハウジングと、それから集住の共用部分を保育園と合築させるということ、あと、全体の計画の中で、地域性を建築に表現させるということを行いました。設計を具体的に試みて、反省点と言えば、住宅の部分が普通の集合住宅に終わってしまったことです。形に関しては色々思案したんですけど、もう少しプログラムが形に現れてくるような住宅部分のデザインと、それが全体に現れてくるようなデザインの仕方があったと今反省しています。

高宮：青木さんの、高齢化問題とか、戦後50、60年代の公的集合住宅の老朽化の問題とか、そういうところに住んでいる人たちのコミュニティの衰退の問題を扱ったわけだけど、それって今の住宅にとって、どれをとってもすごい重いテーマじゃない？ それに真っ正面から取り組んだって所は評価するけど、その、どれをとっても重いテーマを3つもやったというのは欲張っているよね。どれも入り口で終わっているって感じで。それらをね、もう少し深く突っ込めればもっと良い案になったよね。

青木：確かに全部入り口で終わっているなと思うんですけど……。でも、低層部に関しては、粘った甲斐があったなっていうか……。4枚稿提出の一週間前まで粘ってやれたっていうのが結構出て、それなりのものになったと思うんです。

菅野：低層部のデザインは、最後まで粘ってたっていうか悩んでたよね。確かに、あれだけの集合住宅のボリュームに囲まれた低層部に保育園っていう機能をどう入れるかっていうのは、難しいと思うんだよね。その辺はどう解決したの？ あのデザインに決まるまでは、曲線を使ったり、オープンスペースを取ったりとかさ、いろいろやってた訳じゃない？

青木：低層部の「敷地の状況を読み込んで4面をデザインする」というキーワードが出るまでは、低層部のデザインに筋がなかった。4面をデザインするというのを「もっと明確にした方がいい」と高宮先生に言われて、それぞれの違いを出したんだけど……。

高宮：でも、それをやるんだったら、もっと極端に違いを出すべきだったよね。それを僕は盛んに言い続けてたんだけどね。

青木：なんか、どうしても極端にデザインするというのに踏み出せなかったんですね。高宮：やっぱり、低層と上層を分けてデザインするっていうのは、非常に難しいよね。建築の作り方としてさ。多分本当は、低層と上層を分けなくて、もっとインテグレートするような作り方をした方が、本当はよかったんだろうね。

菅野：でも、途中でそういう方法でやろうとしてたよね。芥川：最初、そういうふうになってましたよね。それが次第に分かれちゃって、いつの間にか上だけ決まっちゃった。菅野：それもきつと、幾つもテーマがあってさ、その中でどれを大事にしてやっていくかで変わってくるよね。だから、下の共用部の作り方の方がプロジェクトの中で重要なテーマだったら、そっちの方を優先した作り方のものになっただろうね。

青木：そうだね。プロジェクトの進め方として、私の場合は最初、自分のやりたいポイントっていうのがなかったから、4つのテーマが同時に動いて、そこでやっぱり自分が分かり易いものから入って行って、構造とかコレクティブハウジングとかコレクティブハウジングとかっていうところから入っていったから……。やっぱり、本当は低層部の、共用部の作り方とか、地域性という部分をどうやって作っていくかっていうのを、もう少し詰めていくべきだったし、それがこのプロジェクトの本質的なテーマだった訳だし。そういうスタンスで最初からやったら、上の考え方ももっと全然変わっていっただろうし。

高宮：それからもう一つは、やっぱりこれからはどうしても、都心に高密度に住むっていう絶対的なテーマがある訳だ。プロジェクトの集合住宅は、まだ、容積が余ってるんでしょ？ 青木：ええ、相当余ってますね。高宮：だとすると、逆にそれがこれからもう一つの大きなテーマでしょ？ 今後もっと容積を増やして住むかも知れないし。香港までやれとは言わないけど。やっぱり、都心に高密度に住むっていうのは一つのテーマだからさ。そうすると、それだけゆったり住戸の広さを取って、ろの字型にして、低層、上層に分けるっていうのは、本当は違うんじゃないのかなっていうのはあるかも知れない。とするとそこで、極端に言うと、もっと全然違う提案があればね、

プロジェクトとしてはもっと違う展開になっただろうね。

青木：そこで、地域性っていうものを低層の住宅っていうところに求めちゃったから。

高宮：そうだね、そう限っちゃったからね。

青木：そこがやっぱり良くなって、もっと違う解釈をすれば、住宅棟っていうのはもっと思いっきり高層棟でも良くて、その中に地域性という部分が入り込んでいくっていうデザインにした方が、多分、もっと面白かっただろうし。

高宮：なるほどね。それじゃ、もう一回修士設計やり直しじゃない？

青木：……でもまあそれでもいいですけど……。今後の修士設計をやる人達に対して言えば、集合住宅って、修士でやるテーマとしては、今後、面白いと思うんですよ。今、私がやったテーマだっていっぱい論文が出てるし、それに、そういう現状の問題だけじゃなくて、新しい問題もこれから出てくるだろうし。そういう論文や問題を上手くまとめることができたら、やりがいがあると思いますよ。実際、コレクティブハウジングに関しては、日本ではまだまだ提案が必要とされてますし、スケルトン-インフィルの技術だって、どんどん進歩してることも、まだいまいち浸透してないって感じましたしね。だから、集住に関するそれぞれの問題に対してどんどん突っ込んだ提案をしていくことが必要だと思えますよ。

菅野：集合住宅は、研究とかだったらそれぞれの分野で、すごい突っ込みがいがあるものだと思うんですけど、それを最終的に設計に落とすとするとやっぱり辛い題材ですよ。

高宮：そうだね。

菅野：だから、青木さんも、研究内容と最後にそれを設計に落とし易いテーマにするっていうところの難しさはあったよね。

高宮：やっぱり、一番ほしいのは、卒業制作じゃなくて修士設計でしょ。だから、通り一遍のことを勉強して、「はい、なんとなくまとめました」という設計じゃ困るんだよね。だから、そこで設計に落とす時に、リアリティがあってなおかつインパクトのある提案が必要なんだよね。もうちょっと暴れてもよかったよね。

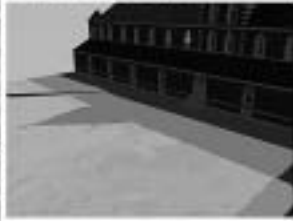
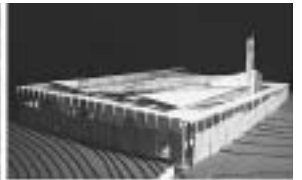
青木：そうですね。確かにちょっと保守的でしたね。

青木 あずさ
指導＝高宮 真介
(芥川 文恵、菅野 二美)

青木：私は都営勝どき一丁目住宅の改築に対して提案を行ったんですけども、今ここでは、老朽化による建替え計画がもちあがっていて、それに対して私

修士設計
ストック型社会における集合住宅の設計
—都営勝どき一丁目住宅の改築への提案—

青木 あずさ
82



修士設計

嚴律シトー会

灯台の聖母トラピスト修道院の計画と設計

土田 耕太郎

土田 耕太郎

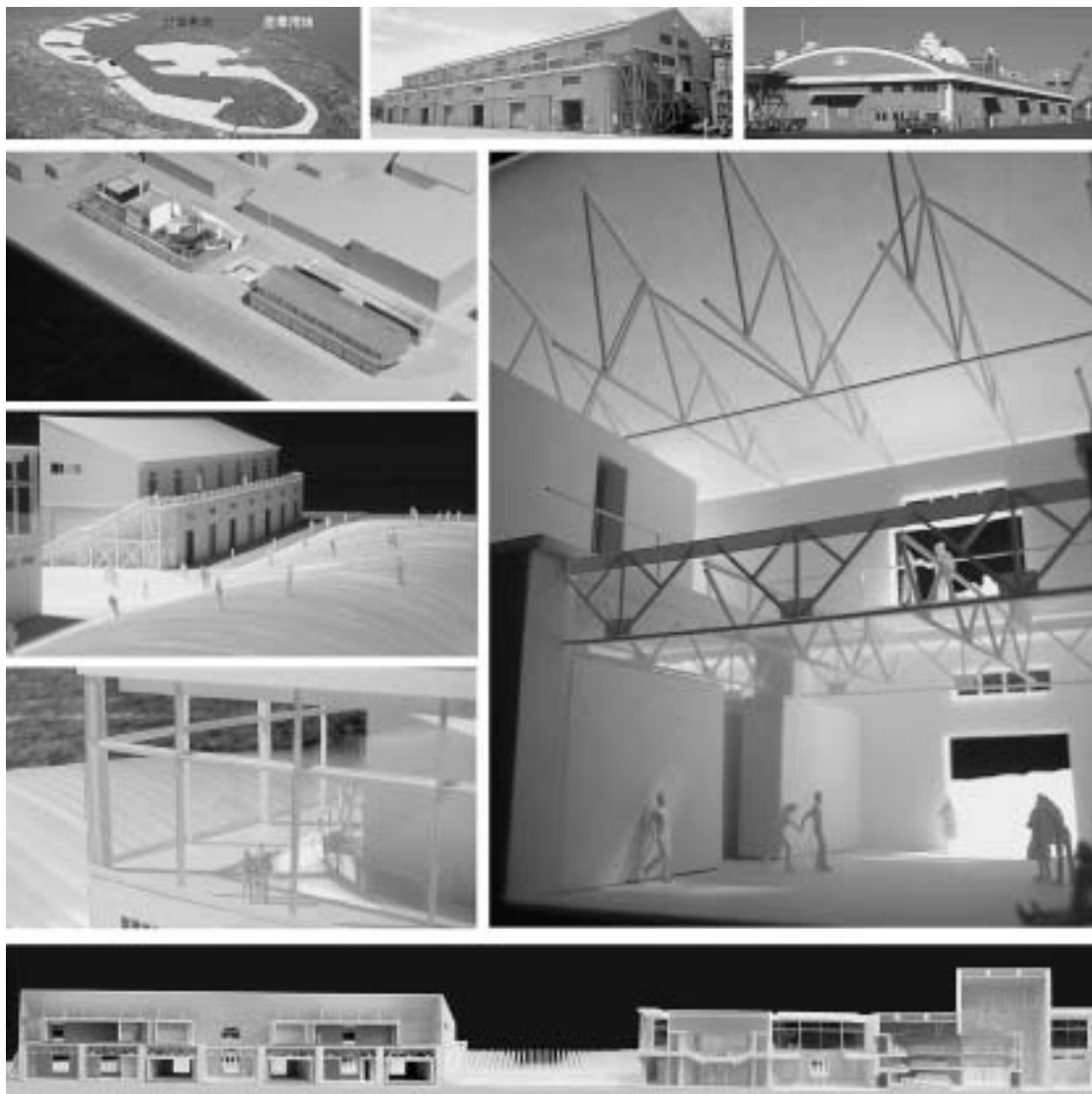
修道院建築はそれが持つ歴史的脈絡から、特異な精神性を有するものとして捉えられている。世間の雑踏を離れ、「戒律」という生活規律を遵守する生活を行う場としての修道院建築は、中世の時代に西ヨーロッパという風土で開花し、発展した。以来、今日までに多くの修道院が創立しているが、これら全ての建築には共通する類型（タイプロジー）が確認できる。灯台の聖母トラピスト修道院は

1896年に北海道・当別の地に創立されたが、そこでは中世のヨーロッパにおいて確立された修道院建築の類型が踏襲されており、中庭を中心とした空間構成を理想としてきた。しかし、1962-65年にカトリックの本質的な刷新を目的として開催された第二ヴァチカン公会議により、修道院も源泉を常に認識しつつも現代の状況を深く認識すること（アジョルナメント）が必要とされた。つまり、修道院建築も伝統的な類型や精神性は継承しながらも、時代や風土、場所性などに適応させることが必要とされている。本計画ではこのような現状を踏まえた上で、トラピスト修道院をケーススタディとして、日本

における観想修道会修道院のあり方を設計として提案する。
指導＝関澤 勝一
私の研究室で教会建築を修士設計としたのは土田耕太郎君が3人目である。最初は栗田孝久君（院91年修了・現 鹿島建設設計部）、2人目は渡辺智介君（院95年修了・現 大成建設設計部）であり、両君とも優れた設計作品をのこし、それぞれ駿建賞を受賞している。土田君は学部の卒業設計（97年卒）でも阪神・淡路大震災後の神戸市内に建つ教会建築を設計し桜建賞を受賞した。教会・修道院建築はキリスト教に近世までARCHITECTUREを

創りつづけてきた。その最盛期はゴシック建築である。近代に入り、キリスト教の影響力が弱まると、そのARCHITECTUREも中心的存在を失った。宗教がもっていた精神性を近代建築の中でどのように高めることが可能か、これがARCHITECTUREに課せられた永久のテーマである。ARCHITECTUREはBUILDINGではなく、ましてやFACILITY（施設）ではない。近代が必要とする建築はBUILDINGの既存概念を破るものでなければならない。土田君の作品はFACILITYと対極の位置にあり、光を主役とするSPACEが創られ、そこにARCHITECTUREがあることに注目したい。

角田 泰孝



修士設計

清水港湾施設(上屋)の市民
舞台芸術活動施設への転用
—地域的な文化環境の形成を
目指して—

角田 泰孝

角田 泰孝

発展のために海を埋め立て、埠頭や工業用地を拡大し続けてきた清水港は、もう一方で市民生活と海との関係を縮小し続けてきたと言える。みなとの産業景観は清水市の特徴的な景観であり地域住民の原風景となってきたが、港湾が再開発されていくのと同時に、倉庫などの港湾施設が取り壊され、みなとの景

する。

指導=本杉 省三

自らの問題意識を持って課題に取り組む、それが論文にせよ、設計にせよ、修士課程で求められる最も大切なことであると僕は考えている。すでにある構想やプログラムに沿って計画施設の活動や内容を受け入れたりアレンジしたりするのではなく、問題に自ら当たっていく中で学ぶことの多さを修士の2年間を通して実感してほしいと思っている。本や資料に当たることはもちろんであるが、正面から体ごとぶつかって考えること、建築が果たすべき役割について考え、具体的な提案を行うこと、それが社会との実際的な関係を学ぶことだと勤めている。

清水市は角田君の郷里で、そこで育った彼が変化する港を捉え直そうとしたところから彼の課題は始まっている。初期の港湾施設が運輸システムの変化によって使用されなくなってきたことに注目し、それをスクラップ&ビルドによって再生するのではなく、港湾の記憶をとどめながら新しい市民生活の場として港をより近い関係に結び付けようとした提案である。その一つの方法として、産業と文化を統合する市民舞台芸術施設を作り出している。このため、市内で文化活動を行っている団体・個人に対してアンケートおよびヒアリングを行い、現在抱えている問題点を整理し、今後の課題を方向付けることをまず調査・研究し、そこから求められる施設の活動イメージと施設内容を提案している。施設の性格上 Box in Box という方法で各室を作る必要があることから、これを全体の計画にも反映させている。既存の壁・屋根などで囲われた空間(Box)の中にもう一つ別の機能を持った空間(Box)を置き、その間の空間を人々の交流スペースとするといった考えで内部も外部も徹底的に構成されている。親水性を水に近いこととせず、岸壁沿いにあえて低い丘(中は駐車場)を作って、港湾の風景と富士山の見える遠景が移り変わるように工夫されているのも気持ちがいい。既存の倉庫がとりわけ美しいプロポーションを有しているとか外壁煉瓦が歴史を感じさせるというわけでもないが、そうした何でもないものに対する温かい眼差しと親近感が感じられ心地よい。